

## 【日本昔ばなし】鬼六

動画リンク: <https://youtu.be/QHH4rZhv5CM>

今回は日本の昔ばなし「鬼六」を学びながら日本語を勉強しましょう。

この動画は、1部、2部、3部に分かれ、3段階のスピードで聴くことができます。1部、2部、3部の順にスピードは速くなり、ふりがながあるのは1部のみです。学習にお役立てください。

### ■はじめに。

お話を始める前に、昔ばなし・童話・おとぎ話の違いについて少し説明します。

### ■昔ばなし

「昔ばなし」には、昔から語り継がれてきた話という意味があります。

語り継がれてきた話なので、作者が誰かはわかりません。

### ■童話

子供が読むことを前提に作られた物語です。

作られた物語なので、当然作者は存在します。

### ■おとぎ話

子供に語って聞かせるための「昔ばなし」や童話のことです。

おとぎ話の中には語り継がれてきた昔ばなしも、そして創作である童話も含まれます。

「鬼六」はとても有名な日本の昔ばなしです。

それでは「鬼六」のお話を始めます。

ある村の真ん中に、大きな川が流れていました。

その川はとても流れが強く速く、昔から何度も村の人が橋をかけても、すぐに流されてしまいました。

村の人たちは困り果てて、都で名高い大工の名人を呼んできて、

今度こそ決して流されない丈夫な橋をかけてもらうことにしました。

大工はせっかく頼まれたので、引き受けてみたものの、その場に来てみて驚きました。

川の水はひっきりなしに、くるくる目が回るような速さで、渦を巻いて、ふくれ上がり、

ものすごい音を立ててわき返っていました。

「このおそろしい流れの上に、どうして橋がかけられよう。」

大工は独りごとを言いながら、途方にくれて、川の水をぼんやり眺めていました。

すると、どこからか、「どうした、名人、そこで何を考えている。」という声がありました。

大工が驚いて見回すと、水の上にぶくぶくと大きな泡が立ち、恐ろしく大きな鬼のような顔がぽっかり現れました。

大工は妙な、気味の悪いやつが出てきたと思いながら、わざと平気なふりをして、

「うん、俺か。頼まれたから、この川に橋をかけようと思って考えているのだ。」と言いました。

すると鬼は顔中口にして、ぎえっ、ぎえっ、ぎえっ、おもしろそうに笑いました。

そうして、大きな歯をむき出したまま、「ふ、ふ、ふ、お前、いくら名人でも、大工にやあこの橋はかからないぞ。」と言いました。

「じゃあ、誰ならかかる。」

「そりゃあ、この俺ならかかるよ。」

「じゃあ頼む、代わりにかけておくれ。」

「そりゃあかけてやってもいいが、何をお礼にくれる。」

「そりゃあかけてくれればなんでもあげるよ。」

「じゃあお前、その目玉をよこせ。」

「何、目玉だと。」

大工もこれには少し驚きましたが、その時はその時でどうにかなるだろうと思って、

「よし、よし、お安い御用だ。」と言って、承知してしまいました。

大工はそれから家に帰って、ゆっくり一寝入りして、翌日また、何気なく川へ出てみました。

すると、川の水は一向に引いていませんが、まさかと思っていた橋が、半分以上も見事にかかっているのです、びっくりしました。

「こりゃあ冗談じゃあないぞ。」大工は急に怖くなって、そっと両方の目をおさえました。

そこでその翌日は、朝早くから起きて、また川へ出てみると、なんと立派な橋が、何丈という高さ

に、  
水が渦巻き逆巻き流れている大川の上に、もうすっかり出来上がって、びくともせずに、長々とかかっているではありませんか。

大工は今度こそ本当に度肝を抜かれて、ただもう目ばかりきょろきょろさせていました。

すると、そのとたん、例のどこからとも知れない川の底から、  
「おい、どうした、大工。さあ、目玉をよこせ。」

と言いながら、鬼が出てきたので、「ひゃあ。」と一声、すっかり青くなって、ぶるぶる震え出してしまいました。

「ああ、ごめんなさい、すぐは困ります。しばらくお待ちください。」大工は泣きそうになって、慌ててその場を逃げ出しました。

逃げ出したものの、どうする当てもないので、今にも鬼が追っかけてくるかとハラハラしながら、

川の岸を離れて山の方へどんどん逃げて行きました。

逃げ出して、山の中をあてもなくうろろうろ歩いていると、どこか遠くの林の中から、子供の歌う声がしました。

やがてその声はだんだん近くなって、つい聞くとともに、耳に入ってきたのは、こういう歌でした。

「鬼六どうした、橋をかけた。かけたらほうびに、目玉、早よもってこい。」

この歌を聞いて、大工はほっとしました。そうして生き返ったように元気を取り戻して、宿屋に帰って寝ました。

その翌日、大工がまた川へ出ると、鬼はさっそく出てきて、「さあ、すぐ、目玉をよこせ。」と言いました。

「まあしばらくお待ちください。どうもこの目を取られては、明日から大工の商売ができません。かわいそうだと思って、何か他のお礼でご勘弁願います。」

こう大工が言うと、鬼は怒って、「何という意気地のないやつだ。じゃあ試しに俺の名を当ててみる。「うまく言い当てたら、勘弁してやらないものでもない。」と言いました。

そこで大工は、わざとまずでたらめに、「大江山の酒顛童子。」  
と言うと、鬼はあざ笑って、「違う、違う。」と首を振りました。そこでまたでたらめに、

「愛宕山の茨木童子。」と言うと、鬼はさらにおもしろそうに、「違う、違う。」と言って笑いました。

それから、まだいくつも、いくつも、でたらめな名を言って、鬼がだんだん飽きて、

怖い目玉をむいて、今にも飛びかかってきそうになったとき、大工はありったけの大きな声を張り上げて、

「鬼六。」と叫びました。

「ちえッ。山の神に教わったか。」こう言ったとたん、ふっと鬼の姿は消えて無くなりました。

「鬼六」は、いかがでしたか？

あなたの国の童話や昔ばなしを、コメント欄から是非みんなに教えてください。

今後の動画制作に活かしますので、コメント欄から感想いただくと大変嬉しいです。

それではまた別の動画でお会いしましょう。



**Japanese-listening-SUSHI**